

札幌区（市）が大都市となるために

はじめに

きょうは、「札幌区（市）が大都市となるために」ということで、明治中頃から第二次世界大戦が終わるぐらいまでの中で、札幌がその次の時代に爆発的に人口が増加していきますが、そのためのいろいろな条件が整ってくることで、後に大都市に発展する可能性が出てきたというお話をします。

1. 日銀札幌出張所長の話

まず初めに、明治35年に新聞に載った日本銀行の札幌出張所の岩佐所長の演説を見ましょう。

その題名がセンセーショナルな「札幌衰亡論」という札幌がだめになっていく話です。出張所長がこういう発言をしました。これには札幌にとってとても大変なことを述べています。

札幌市公文書館第4回講演会2015年11月28日
札幌区（市）が大都市となるために
札幌市公文書館根本洋介

1. 日銀札幌出張所長の話
 - 『札幌衰亡論』（北海道毎日新聞明治35年1月24日）
 - 北海道庁 炭礦鉄道会社本社 工業 商業
 - 大通りの草は益々芊々として成長し變る變ることだらう。道途の藁やタンポポは時を得顔に咲き誇るであらう。
 - 『札幌船渠論（一）～（四）』（北海タイムス昭和2年2月8日～）
 - 論駁（1）～（4）（北海タイムス昭和2年3月15日～）もあり
2. 都市として成長する札幌
 - 札幌区の人口
 - 明治15年9,001人、20年13,534人、30年35,306人、40年66,193人
 - 札幌の工業
 - 都市問題の発生 都市機能整備 除雪 電灯
 - 明治25年札幌大火
 - 大正2年頃の北海道の都市
 - 大正12年に都市計画法の施行
 - 市内交通機関整備 石材馬鉄 札幌馬鉄の開業 電車の開業 バス開業
 - 昭和初期 市営電車と市営バス
3. 道都札幌の確立
 - 明治42年北海道庁の全焼
 - 北海道庁の移転論
 - 大正昭和、札幌の地位
 - 大正9年国勢調査 函館区144,749人、小樽区108,113人、札幌区102,580人
 - 昭和5年国勢調査 函館市197,252人、札幌市168,576人、小樽市144,887人
 - 昭和15年国勢調査 札幌市206,103人、函館市203,862人、小樽市164,282人
 - 大正昭和の役所
 - 銀行の集中
 - 第3次産業就業人口の増加
 - 昭和20年22万人 30年43万人 40年79万人 50年124万人 60年154万人

当日のレジュメ

この文章は、「左様私も亦札幌は将来あまり発達の見込みがないだらうと考へる」と

いう言葉から始まっています。「左様」とか「私も」という表現からすると、以前に誰かが同じ新聞上で札幌の将来の見込はないという発言しているようです。

私どもでは、『新札幌市史』を書くために明治20年から昭和43年の札幌に関する新聞記事のスクラップを用意したのですが、それを見る限りは続き物ではないのですが、話の内容から見ると続き物の一つのようになっています。

題名が衰亡論で、最初の言葉が「札幌は将来あまり発達の見込みがないだらう」と語り始めます。

次に（１）で、「蓋し札幌今日の発達は道庁所在地たり」と。札幌が発達していく原因の一つが道庁があるからだと言っています。

「行政機関の中枢地たるがためにして、他日若し此の行政機関の中枢が他に移ることがあるならば――道庁が他の地方に移転するやうのことがあるとすれば、札幌はために一大打撃を被るべき訳である」といい、道庁が移ったら札幌というのは打撃を受けて衰退してしまうといいます。

次は「而して斯かる時機即ち行政機関の中枢を移し道庁を引き越すべき必要を感ずるの時機が遠からずして来ることだろうと思はれる」ともいい、続けてその理由は、「抑も今の札幌は全道一般の開発進歩を見たととき尚ほ行政機関の中枢地たるに適せざるは論なき所」と言っていますが、道庁を置くような地理的に良い場所ではないということです。

「其の余りに一方に辟在するや他日東北地方の大に開発し進歩することともに、全道の中心点として適當の土地に道庁を移すやうにしなくてはならぬのは分り切つたことである」と言います。札幌が北海道の中心より東に寄っているから、全道の開拓が進むと、もっと真ん中のほうに行くべきだろうという意味です。そのことは「分り切つたこと」だとも言っています。

「サテ其の適當地は何処であるかと云ふに私は先づ上川郡旭川あたりだらうと思ふ、目下計画されて居る三個の鉄道線が完成して旭川に落ち合ふよになつた暁は無論道庁を此所に移して全道いづれの方面にでも自由自在に出張し得るやうにするのが便利でもあり必要でもあるから」と言い、旭川を中心とすると良いと言っています。それから、今、予定されている鉄道線路が完成した以降という言い方をしていましたから、多分、函館本線はこのころ旭川まで行っていたと思いますが、それ以外では、旭川から発するのは北見方面へ行くものと宗谷へ行くものでしょうか。島義勇ではないですが、交通の便が四通八達すれば旭川がいいのではないかと知っているわけです。そして、「此の時期を以て道庁は此の地方に移されるに相違ない」は、「相違ない」と言っていますから必ずに近いのではないかと思います。

「是れは私一個の意見ではなく上川を視て来た人の多く云ふ所の意見である」とも言っています。これらのことを逆に言うと、札幌に道庁があるから都市として発展しているだけだよということです。だから、開拓が進んで、より北海道の中心地として適當なところが開けてきたら、そこへ移したほうがいいだろう、そうすべきであり、衆目の一致するところだということのように言っているわけです。

上川に中心を置くというのは、明治10年代ぐらいから何人も言っています。その1人は、岩村通俊という道庁初代の長官がいますが、彼は開拓使時代の明治4、5年には札

幌本庁担当の（大）判官で、札幌の都市建設の最初のころに携わった人ですが、明治10年代に上川に北京を置こうという意見を出します。明治20年代になると、北京ではなく離宮を上川に置こうという意見が出てきます。そういう人たちや岩佐日銀出張所長の最後の言い方でいくと、その頃の政府高官や経済関係の幹部、今で言うと有識者たちは意見を同じにしているという言い方をしています。とりあえず、道庁とか政治的な中枢という言葉を使って、それが札幌にあったから札幌が発展したのだ、なくなればじり貧だということ言っています。

次いで、「(二)」では、「サテ道庁がイヨイヨ上川に移され上は炭礦鉄道会社が依然として札幌に本社を置くだらうか否かは一疑問だが、私どもの考へではこれも亦岩見沢かどこかアッチの方に移されるやうにならうと思ふ」といっています。この場合は交通機関という話だと思いますが、交通の結節点のもっと適当なところがいいだろう、それが岩見沢だと言っています。函館本線と室蘭本線との分岐点で、空知炭田の石炭を小樽方面へ送ったり室蘭方面へ送る結節点が岩見沢となりますから、鉄道運輸関係の会社だったらそちらのほうがいいだろうという意味です。「蓋し現今本道鉄道の形勢より見て炭礦会社が其の本社を札幌に置くと云ふのが地理上既に変である」といい、この時点でもう既に変だと言っています。

「唯だ道庁が札幌に在るために諸般の交渉其他の便宜から已むを得ずして本社を札幌に置くに過ぎぬので若し道庁が他に移転したならば炭礦会社の本社最早札幌に置くの必要なく当然本道鉄道の大勢より打算し来りて最も便宜の地に移るべきは明白のことだらう」といい、道庁との関係や仕事上の関係があるから札幌に置いているが、道庁がなくなったら炭鉱鉄道が札幌にある必要はないだろうといっています。

「況んや現今札幌本社の附近は湿地なるのみならず地価も余り安くなく今後本社を拡張せんとすれば非常の大金を要し且つ不便な訳なのだが、斯かる大金をかけて札幌の本社を拡張せんよりは寧ろ他の便宜の地に本社を移す方が特撮であるから」云々といっています。交通関係の中心会社も、道庁がなくなったら札幌にある必要はないということです。

次に（三）は、「ソレなら工業地として発達するかと云ふに」と、工業地帯、工場がたくさんできるような工業都市になるかということに言及しています。

「発達するかと云ふにサウに思はれぬ現今のビール会社や製麻会社は開拓使時代に大金をかけて拵へてやつたものだから今でもそのまゝ営業をして居るやうのもの今日ならば札幌のやうな所へ設けずと他にモット適当なる土地に設けたらうと思ふ」と。確かに、開拓使時代、明治に入って北海道開拓を進めるときに、札幌本府を中心にした経済をつくるために、開拓使では官営工場を幾つもつくります。その一つがビール工場です。また製麻会社は開拓使がつくったわけではなく、道庁になってから民間資本でつくったものです。そのため、開拓使が製麻会社を作ったというのは間違いですが、この場合、話しの筋には問題ないでしょう。所長の意図は、開拓がだんだん進んできた今だったら、大きな工場を札幌にだけつくる必要はないだろうということです。開拓使時代は、開拓が進んでいたのは札幌周辺ですから、そのときは札幌に工場を置くことに一つ意味があったが、開拓地が広がってきて、明治30年代及びそれ以降になったら、別に札幌でなくても他に適地があると言っています。

さらに「此の二会社は斯かる特別の事情によりて設立されたが故に今日已むを得ず札幌に在るのでこれより以後興るべき新会社は決して札幌には設置されぬだらう」というように、札幌には絶対工場が来ないだらうとっています。「アノ不便な札幌がドウして工業地として発達するものか」とまで言っています。ちょっとひどすぎる表現です。

次いで、(4) ですが、工業がだめなら商業はどうだろうか考えます。

「商業地としてはドウである、これも駄目だ今日でさへも既に商業は札幌に於て行はれて居ない」のだそうです。

その理由は、「本道の貨物は札幌人及び其の附近の人民が需要する少量の貨物の外が札幌に降ろされずズンズン札幌を通過してしまふではないか、今日既に然りだ」といいます。これは、明治20年代に空知の滝川以北、上川地方の開拓が始まり、そちらに移民の人たちが多く入っていきます。そのような奥地のほうに鉄道路線が伸びていったときに、小樽におろされた荷は、小樽で炭鉱鉄道に乗せて奥地に送ることになりますが、札幌におろされるのはその内の少こしだけで、あとはみんな奥地に行くことにある。ということは、物資の流通が札幌は少ないという意味です。そのため商売が成り立たないだらうということなのです。

「況んや道庁も移転し炭礦会社も移転した暁には札幌駅の貨物は極めて少きものとなり札幌の商法は至りて微々たるものとなるだらう」と結んでいます。商業はどんどん小さくなっていくということなのです。

次の(五)では、その後の話になります。結局、開拓が進めば道庁が旭川あたりに移転する。交通機関の中心会社もどこかへ移る。それから、工場群も札幌から他に移っていく。商業も、札幌ではもう物資流通が少ないから全然行われなだらう。その結果、札幌はどうなるか、「果して然らば将来の札幌は如何なる有様になるだらうか、憶ふに琴似、月寒、円山等村落の農民やビール会社製麻会社を相手として極々僅かの商売をなし一町村となり了るだらう」。しかし、このような情態になったら実際には、ビール会社、製麻会社もどこかへ行ってしまふでしょうから、もっと悲惨な状況になるのでしょう。とにかく、ごくごくわずかの商売のある、都市というより町村のようなものになっていくと言っている訳です。

さらに読み進みますと、「大通りの草は益々芋々として」の「芋々として」という草かんむりに千という字で、草がぼうぼうと生えているような様子だそうです。大通も草がぼうぼうになってしまい、「成長し蔓る蔓ることだらう、道途の葎やタンポポは時を得顔に咲き誇るだらう」と言っています。ぺんぺん草が生えるようなところになってしまふという表現もありますが、そんな表現ということでしょう。ただ、少し表現を控えている部分もあります。「五歩で大木十歩に藜莽狐狸恣に出没したる開拓以前の荒涼たる有様とはなるまいが」というように、都市建設前のような状態までは戻らないだらうということなのです。でも、「札幌の将来は気の毒なものとなるだらう」と言っています。

もちろん、この所長の言の通りにはならなかったことは皆さんおわかりであろうと思います。あくまでも明治35年ごろのある識者の予測です。これを真面目にとるかどうかという話ではなくて、ここに書いてあることを時代に合わせて検討してみましょうというのがきょうの話になります。

例えば、札幌が物資をおろす場所ではなくて通過点になっているとありますが、奥地

の開拓が始まれば当然そうなるわけです。ただ、それをどうやって解消するかを考える人もいます。先ほどの岩佐所長に反論するためではないですが、札幌を発展させるための意見が新聞に掲載されます。その一つだけご紹介します。

先ほどの岩佐所長の話からは20年以上たってからの話ですが、「札幌船渠論」という記事が載せられています。「船渠」というのは、辞典を見ると「ドック」という意味が載っています。函館ドックというと造船会社のことです。この記事で使われている意味は、船をつくるほうではなく、船を着けて荷物を揚げおろしする港のことです。

これもちゃんと読むとおもしろいのですが、簡単に話を紹介しますと、やはり先ほどの岩佐所長の話を受けているような話の部分があって、物資が札幌を素通りしてしまうということへの対処として、新川を拡張して札幌のまち中に港をつくりましょうという考えです。小樽に船が入って荷おろしする分を新川を通して札幌の街中まで持ってきて荷をおろして、札幌駅から積み出せば札幌あたりが潤うだろうという考えです。

筆者は、林という留萌築港所長です。一応、長という立場の人が札幌に港をつくって荷の揚げおろし場をつくろうという案を出しています。ただ、レジュメに書いてあるとおり、これは即座に反論も出ていまして、そんなことは無理だと書いています。委しくは省略します。岩佐出張所長の話をも多少問題視していたとしても、20年以上たっていますから直接的な反論ではないようです。しかし札幌を物資が素通りしているという問題があり、その解決策を模索している動きでした。

②札幌船渠論

